

# ホトトギス

二月号

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別掛承認雑誌第六二七号  
明治三十二年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回二日発行)  
平成十六年二月一日発行(第百七卷第二号)



# 旬日記

汀子

平成十五年二月一日 菅屋ホトギス会

日本の寒さ忘るる旅衣  
牛飼へば村は富むべし春隣

二月二日 関西野分会

帰国して庭一と巡り迎春花  
猫の恋人の生活の中にあり

二月三日 下萌句会

旅疲れ少し忘れぬ迎春花  
待春の光の中に帰国かな

二月二日 悼伊住政和様

雪折の若木の力惜みけり  
臘梅の香のほどけぬし帰国かな

二月三日 ロイヤル俳壇

若き死を悼む追儺の夜なりけり  
二月十二日 清交社

冴返る心引締めをりしかな  
冴返る路面と聞きて運転す

先導の消えし野焼の煙かな  
冴返る日の葬送となりけり

機内食白魚少し添へてあり  
野焼してをりし交通渋滞に

雨上りをりし朝の冴返る  
明るさに頼りをりしも冴返る

惜しまるる若き命や冴返る

二月十四日 工業倶楽部

旅心パレンタインの日なりけり  
日帰りの旅は身軽よくロッカス

凍解の加速に雨の一日かな  
旅人にパレンタインの日の出会ひ

大地割り来たる力よくロッカス  
二月十六日 日本伝統俳句協会関西支部大会

旅に覚め昨日の晴を消す臘  
二月十七日 アサヒカルチャー

春眠くなり心地よき旅疲  
雨雲を払ふ家路や春の月

快晴も雨も春めく旅路かな  
二月十七日 綿業倶楽部

雨上り余寒も消えてをりにけり  
春の月隠す雲なくなりて着く

二月十八日 大阪倶楽部

旅疲れ癒す家居や冴返る  
怠けたき家居心は冴返る

梅夕べ紀州の旅の名残とす  
みよし野の初音魁けをりし宿

二月十八日 無名会

早春の旅に心地のよき目覚め  
早春の旅路を濡らす朝の雨

早春の一消息として聞きぬ  
焼山といへども富士の一部分

早春の籠る仕事の山抱きて

二月十九日 夏潮句会

焼山の色を沈めて阿蘇五岳  
あたゝかや心通はず旅路とは

まだ会の余韻を梅が香に曳きて  
目印のミモザの花の色に出し

実朝忌波音近き能舞台  
遠き旅近き旅はや梅二月

二月二十日 悼母上様高濱喜美

声をかけても応へなし梅寒し  
梅寒し朝の明るさともなひて

梅散つてなほ凛と立つ古木かな  
母葬り来て如月の富士に帰路

亡骸の応へあるごと梅寒し  
二月二十三日 野分会

野良猫の器量不器量猫の恋  
迎春花夜明の色を置きそめし

二月二十四日 悼澤原たけお様  
記念樹の冬芽に偲ぶばかりかな

二月二十八日 時雨会

あご髭の威厳親しき鳴雪忌  
下萌を踏みて行先ありにけり

子規偲び虚子を語りぬ鳴雪忌  
梅寒し天寿全うせしとても

在すごとマンションを訪ふ春の宵  
なつかしき話次々春灯下

# 写真集

稲畑汀子

写真集の話が持ち上がったのは何時であったか、昨年の虚子忌の時が思い出される。

寿福寺の境内に日本の各地から来た俳人たちが集まっていた。

その境内の人達を縫うように何となく身边で静かにシャッターを切る一人のカメラマンの姿があった。

「実はご相談したいことがあるのでお邪魔させていただきたいのですが」

「東京にいる時にですわね」

「よろしいでしょうか」

「東京滞在中はスケジュールが多くて時間がとれるかどうか、でも何とか段取りをしてみましよう」

その日がカメラマンの蛭田さんとの仕事の始まりとなった。

写真を撮られるという仕事は想像以上に忍耐を強いられるものであった。

「私は素人だということを忘れないで下さい」

と私は何度も言い、蛭田さんは

「承知しています」

と答えるのを繰り返した。

私の一年間のスケジュールを毎月細部に到るまでFAXするホトトギス社へ問い合わせる蛭田さんから私は逃げも隠れも出来なくなつた。

「先生らしい姿を写させていただいたので、一切修正はしません」

「あら、私も女ですよ。同じなら綺麗に撮っていただきたいですね」

「先生らしい姿を写させていただきました」

返つて来る答えはいつも同じである。

「それでは、本になさる前に見せて下さるでしょうかね」

「それは多分出来ないでしょう」

「いやだなー」

「先生は随分過酷なスケジュールで仕事をこなして居られるのでびっくりしました。体がやられてしまいますよ」

「大丈夫ですよ。ご存じない所でさぼっていますから」

「驚きますよねえ」

蛭田さんだつて私に置いて旅をするのに大変である。やがてその年も暮れ、新しい年が明けると蛭田さんは二日にはもう芦屋の我が家へ訪ねて来られた。二月には母が亡くなり、その葬儀にも参列して下さつた。

何時の間にか私は写されることに馴れていくのと同時に、少しずつ煩わしい気持ちを抑える事が出来なくなっていく自分に気がついて愕然とした。

「蛭田さん、もういいでしょう、もう代わりばえしない場面ばかりになりますよ」

「まだですね、良い写真集にする為にもっとチャンス下さい」

「もうだんだんいやになってるのよ」

本音を洩らすようになってだんだん恐い顔になっている自分が情けなかった。

「インタビューのための時間を沢山いただかなければならないのです」

「そんな時間がとれるかしら」

「先生、それがこの写真集のメインなのですよ」

「分かりました」

「それと、表紙の写真が残ってるのですよ」

「今まで随分沢山撮って頂いたなかに表紙の写真はないのですか？」

「ありませんねえ」

「先生、大変でしょう。聞いてますよ」

NHKの廊下で出会ったNHK出版編集長の佐藤さんに声をかけられた。

「そうだ、蛭田さんは佐藤さんと一緒に『句帳拝見』の取材で来られたカメラマンでしたか」

「もうすっかり密着して撮られるでしょう？」

「まあよくご存じね」

「それは知ってますよ。楽しみにしていますよ。NHK俳壇でもその本が出版される十一月号に合わせてインタビューを計画しています。そのカメラマンは蛭田さん！」

写真集はモノクロである。それにインタビューが入り、私のこれまでの俳句が私の自句自解を添えて何句か載るということに決まった。

「今日は女房が助手をしに来てくれました。先生、マンションの外まで出て来ていただけませんか」

いよいよこれが最後になるという撮影の日の朝である。東京の仕事部屋で泊った私は準備していた服装に替えて待っていると約束の時間ぴったりに電話が鳴った。

「分かりました。すぐに参ります」

車道を渡った所に素敵な夫人を助手にしてカメラが三脚で立てられてある側に蛭田さんが待っていた。

「先生、主人が随分ご迷惑をおかけしています。今日も朝早くからもうしわけございません」

「素敵なおくさまですねえ。私はだんだん我が儘になって、こちらこそ迷惑をおかけしているのですよ」

カメラマンという仕事も本当に大変だと思いながら、もうこれで写されるのもお終いだと思うとほっとした気持ちが湧き上がってくるのを感じていた。

# 廣太郎句帳

## 廣太郎

日を返しつつ大川の春浅し 梅林を統べる一樹でありにけり

早春の水尾気紛れな蛇行かな 二月十六日 日本伝統俳句協会関西支部大会

寒明を拒む大川水の色 獵名残火色も美しきもてなしに

バレンタインデーに戸惑ふ太典氏 高速道抜けて梅林抜けて句碑

平成十五年二月三日 俊英句会

碧梧桐忌虚子特集の俳誌かな

二月七日 小池星児様句集出版祝句

二月十八日 草木瓜会

冬の空割つてスペースシャトル落つ

アルプスの雪解便りや句集出づ

若布刈竿地球を刈つてをりにけり

探梅や芝公園てふビル街に

二月十二日 三番町句会

野火煙水墨画めく山路かな

二月五日 一水会

俳磚の又一つ増え草青む

集ひ来て二月礼者の句会かな

風神の加勢を受けて野火走る

寒明の訃報は若き誌友かな

絵踏せし世は今とどう違ふのか

若布刈舟平家の裔といふ生活

二月六日 蕉心会

鯨挿して淡海の景を引き絞る

句碑生れて稲城熊野を繋ぐ野火

新聞を今日も賑はす春の風邪

二月十三日 土筆会

二月二十八日 時雨会

蕉像の瞳虚ろに余寒かな 東京に公園多し初音聞く 鳴雪忌追悼号のセピア色

丸の内より森下に来て余寒 鶯や中辺路に又句碑生るる 人悼むさまにかたかご咲き揃ふ

下萌えて大川端の色となる 谷渡して鶯の訛声 鳴雪忌一人追慕の人加へ

# 雑詠 汀子選

五十年前の語り部月見草 東京 稲畑廣太郎  
 もてなしといへど夏炬の燃え過ぎて 同  
 又来よと虚子が隠せし霧の富士 同  
 月仰ぎ見ては厨にまた戻る 同 今井千鶴子  
 一と夜さの月の芒のほほけやう 同  
 わが眠り月は渡つてゆくばかり 同  
 ひと寝入りしたる雨月の霽れてをり 同 河野美奇  
 虚子山廬人も話も露けしや 同  
 夜明けゆく湿原の音露しぐれ 同  
 心眼で見よと富士置く秋徼雨 神戸 田中由子  
 灯下親し虚子のお部屋と聞きしより 同  
 露踏んで明日又訪はん虚子山廬 同  
 虚子塔へ露の箒を借り申す 同 千原叡子  
 松籟のさまよふ大地星月夜 同  
 冷まじき星の深さによるめきぬ 同  
 俊英の一人が欠けし夏行とも 京都 安原 葉  
 夏行とは行手の雨の荒るるとも 同  
 富士仰ぐ期待捨てよと秋徼雨 同

一日を今生として底紅も 神戸 後藤比奈夫  
 絶筆の痰といふ字が寒からず 同  
 うすにがり酒美しきうすにがり 同  
 曼珠沙華赤すぎる空青すぎる 榎原 稲岡 長  
 曼珠沙華燃ゆる真中に堂暗し 同  
 曼珠沙華消ゆるときまで蕊伸ばす 同  
 こぼんさん安居は二泊三日かな 和歌山 辻本青塔  
 こぼんさん安居むささび聴きにゆく 同  
 雑巾をかたくしぼりて安居作務 同  
 そぞろなるころに霧の高野発つ 龍野 浅井青陽子  
 雨上り霧の湧きたつ熊野路に 同  
 連日の山居わきたつ蟬しぐれ 同  
 蟠り解けし二人に虫の夜 仙台 小島左京  
 二重奏三重奏の虫時雨 同  
 ライン河山傾けて葡萄畑 同  
 糸瓜忌や貸して戻らぬ書の二三 神戸 山田弘子  
 日本派にすこし深入り獺祭忌 同  
 虫時雨犬山城をのせてをり 同  
 朝粥の白さ術後の梅雨寒を 下関 松本圭二  
 梅雨明と共に去りゆくわが病魔 同  
 ほとゝぎす余命惜しめと聞こえけり 同  
 きりん草一揆の如くむらがりて 姫路 桑田青虎  
 猿酒や祖谷の落人暮しをる 同  
 冬瓜を持参されたる志 同

## 雑詠句評（二月号より）

雲脱したる月のごと脱稿す 東村山 村松紅花

小生など書き上げなければならない原稿を持つと、さまざまに思いが交錯し、出来上るまでにかかなりのエネルギーが要る。反古が出来たり、とにかく稿を起こすことは大変な仕事である。作者は一気にさつと完了されるタイプかもしれないが、早く出来ても遅く出来ても、とにかく期限までに仕上げなければならぬ原稿を持つ辛さには変わらない。そして原稿が完成した直後の解放感を「雲脱したる月」とはうまく喻えられたものである。黒い雲に覆われ、まだかまだかと待つ月への思いは俳人にしか判らない純粹な憧憬であろう。だからこそ雲の中の月を待ち望み、そしてその雲がさつと引き、現れた月への感慨はまた一人なのである。「脱稿」の思いを具体的な月の姿に喻えることによって、作者の気持ちに手にとるように分かる。比喩の使い方は本来むづかしい

ものであるが、共感を呼ぶ一句となっている。（青虎）

黙々と恪勤に原稿を書き上げてほつとした作者。月が雲に隠れてるように書き終わらない状態の鬱々とした時からやつと原稿を書き上げて自分の周りの雲を払い終り、或いは雲から抜け出したような明るく照らす月の心になったと思える喜びが読者にも伝わってくる秀句である。（汀子）

新秋の俄に近き一忌日 神戸 山田弘子

「新秋」は季題「初秋」の傍題であるが、文字通り、秋の初めころをさす初秋の心持に加えて、秋の気配の新鮮な感触も伝わってくる季題である。夏の暑さの衰える気配が俄に見え始めたかと思ふ新秋のところに、身近な一忌日が近づいて来ているの思い知らされている作者の心情が伝わってくる句。面影を偲びながら彼の時の季節の感じを思い重ねている作者で、「新秋」という季題が情ふかく見事に詠まれている。（葉）

暑く厳しかった夏が過ぎて、秋の感じが俄に身边に迫ってくる。と作者にとつて大切な一忌日がやってくる。暑い不順な日々を乗り越えるべくともに闘ってきた病の日々を思い返し、ようやく新秋を迎えた頃に失った人を感じる。作者の心情が感じられる。（汀子）  
（以下略）



# 若水集

## 廣太郎選

赤い羽根・稲

王様のごとし稲田を眺むるは 岩見沢 清水里美  
 汝も赤い羽根つけてきし逢瀬かな 同  
 百年の計のかなひて蝦夷の稲 同  
 稲熟るる地球をさらに丸くして 大牟田 田中黎子  
 稲熟るる色に安らぎぬる車窓 同  
 稲筵とは阿蘇谷にこそ言へて 同  
 稲の 秋空へ仕上る千枚田 香川 島谷碩洲  
 稲穂波つなぎ合ふ音暮れて来し 同  
 バスの窓捉へ続けてゐる稲田 同  
 金の鈴鳴らし稲穂の風熟るる 鳥取 椋誠一朗  
 稲筵見しより里を恋ふるなり 同  
 はや赤い羽根通りとはなりしかな 同  
 赤い羽根小さな風が胸に生れ 大阪 塙 告冬  
 朝風の立ち寄る胸の赤い羽根 同  
 子の手より風ともらひぬ赤い羽根 同  
 六甲の風紋つなぎぬる稲田 西宮 本郷桂子  
 稲の香の風となるより家路の灯 同  
 山の手に住み稲の香の夜風かな 同

稲筵 綻び遊ぶ三輪車 鳥取 岡田順子  
 風倒に水漬くに稲とある生活 同  
 稲の香の郵便局に投函す 同  
 一村のみのり遅れし稲を守る 長岡 入村玲子  
 赤い羽根心づもりの町着かな 同  
 そこはかとなき稲の香も里住ひ 同  
 貧しき日集め棚田の稲は穂に 鳥取 尾田美智子  
 休め田といふ綻びに稲筵 同  
 町騒を抜けて五分の稲の秋 同  
 水口の初穂を神饌に奉る 大分 水摩知義  
 赤い羽根声が歩みを引寄せし 同  
 赤い羽根はづし忌心深くせり 同  
 天領の名残の平野稲の秋 別府 是永素江  
 稲田へと最も日ざし濃かりけり 同  
 由布昏れて稲田が昏れてゆく家路 同  
 赤い羽根胸に体調もどりし歩 金沢 笠森きみ糸  
 赤い羽根つけて胸元若がへる 同  
 稲筵思ひたるより島広し 同  
 駅頭の旅の一步の赤い羽根 福岡 吉武草徑  
 赤い羽根つけて祝辞の颯爽と 同  
 黄昏のしじまに紛れゆく稲田 同  
 北限の豊かな稲にふれて旅 旭川 続木元房  
 北限の稲に太陽ほしきとき 同  
 赤い羽根つけてもらひて退院す 同

## 若水集句評 廣太郎

王様のごとし稲田を眺むるは 岩見沢 清水里美

広大な田の様子が見て取れる。昔は広々と稲の実った様子をその土地の領主はこの句のように眺めたのではないだろうか。「王様」という言葉が何か日本だけではないもつと普遍的な空間を想像させるが、作者の心持ちも、雄大な景を前にして志高く伝わってくる。

赤い羽根はづし忌心深くせり 大分 水摩知義

忌の営みに向かう途中で、募金をした作者なのである。喪服の上につけた「赤い羽根」も会場近くなり、その色ゆえのミスマツチを感じた。外した事による忌心の深さが、羽根の色の鮮やかさと不思議な対比を見せている。

由布昏れて稲田が昏れてゆく家路 別府 是永素江

黄昏時の静けさが漂ってくる句である。大分県「由布岳」の麓にある「稲田」なのである。黄金色に実った稲も夕暮れには色

を淡くしている。山と田のコントラストが墨絵のように目の前に拡がってくる。

赤い羽根つけてもらひて退院す 旭川 続木元房

病院のひとつのイベントのようにも思えるが、退院した帰り道に募金をされたのではないだろうか。退院の喜びが、募金をして晴れ晴れとした心境と相俟って「赤い羽根」が一層輝いて目の前に迫ってくる。

稲の秋駅裏に棲み五十年 香川 松原一馬

長年一箇所に棲んでいると、その土地の変遷が手に取るように判る。特に都市化が進む現代では、作者の生活してこられたこの「駅裏」から見る「稲の秋」もだんだん小さくなってきたのではないだろうか。平明な表現であるが故にしみじみとした心持が語られている。

赤い羽根音あるなしの募金箱 新潟 藤井敏子

大枚を叩く人がどれだけいるのかは判らないが、一般的にはその人の持つている中から小銭をささやかに入れるのが「募金箱」なのである。「赤い羽根」の募金箱自体もそれほど立派な造りではないのが一般的であろうが、そんなささやかさが「音」という言葉一文字からも伝わってくる仄々とした句である。